

ーズ——No.8 乳癌, p. 43~52, メジカルビュー社, 1986.

3) 駒木幹正, 坂元吾偉, 他: 乳腺凍結迅速組織診——その正確度と診断困難な症例の特徴, 癌の臨床(別冊: 乳癌の臨床II), p. 238~247, 1986.

4) 坂元吾偉: 非浸潤性乳管癌と乳頭腫の鑑別, 病理と

臨床, 2, 1087~1091, 1984.

5) 坂元吾偉: 乳房, 外科病理学(石川栄世, 他編), p. 777~812, 文光堂, 1984.

6) 坂元吾偉, 他: 乳腺の小葉癌, 癌の臨床, 22, 449~456, 1976.

基本を大切にする気持ち

現代医療の中であって〈生検〉の果たす役割については、今さら強調するまでもない。臨床医学の専門化、細分化が進むに従って、病理でも大いにその影響を受けている。臨床各科の現場からは、迅速で正確な病理診断を常に求められている。

生検の対象となる病気はさまざまであろうが、日常、良性病変か悪性かを確かめる目的で検査されることが多い。

悪性腫瘍に対して強力な抗癌剤が用いられる時代であるので、剖検時、癌がどこにも見いだされない症例に遭遇する場合がある。そこでは、生検時の診断がいつそう重要となる。確定しないで、疑診のままで大手術が行われることがあってはならないと思うが、生検時の病理医の適切な指示や臨床医の慎重さが大いに関係する。生検材料の扱いに注意を払い、必要かつ十分な検索をする態勢(細胞診の応用や電顕材料を採取しておくことなど)が望まれる。

病理検査は医療の良心を支えるものだからかねがね信じている。しかし、この病理検査をもってしても、診

こぼれ話

断が確定し難いことは、まれならずある。理由はいろいろあると思うが、病理医はこのようなケースをどのように対処しているであろうか。

私もは、新しい、より客観的なデータを提供する技術を絶えず求めてやまないもので、検査技師の方々の協力によるところが少なくない。例えば、今や酵素抗体法などが多くの施設でルーチン化している。これは確実に時代の進歩を感じさせるが、それに頼りすぎる傾向はないであろうか。HE染色や従来の特殊染色標本を、以前と同様にいいねいに観察・評価しているであろうか。私自身だけが感じている危惧ならよいのだが……。骨・軟部腫瘍の場合には、最近特にそれを感じるのであるが、私自身も、あまり感心できない影響を受けている一人かもしれない。人の欲望は尽きることを知らない。新しいことも、大変魅力があるが、やはり基本を大切にする気持ちはいつまでも失いたくないと思う。

(東京慈恵会医科大学教授・病理学 牛込新一郎)

医学書院 刊

これからの地域医療 「健康づくり」の進め方

宮原伸二

●A5 頁206 図27 写真14 1986
¥2,200 千300

本書は、早くから自ら進んで農村に身を投じ、医療関係者のみならず、マスコミからも注目を浴びる「健康づくり」運動を進めている著者が秋田県象潟町上郷での13年間の実践を総括したもの。健康についての考え方、住民の組織化、健康づくりのキーである住民自身の健康学習をどう進めるか、などのノウハウが盛り込まれている。

医学書院 1113-91 東京・文京・本郷5-24-3 ☎東京(03)817-5657(販売部直通) 振替東京7-96693